

## 42 台湾故宮所蔵の日本関連古医籍

真柳 誠

台湾所蔵の古医籍は、本年五月段階で計一五三八点の書誌情報がインターネットで公開されている。所蔵先は故宮博物院図書文献館が八一〇、国家図書館(旧中央図書館)が六四八、中央研究院図書館が六四、台湾大学図書館が一四、中央図書館台湾分館が二だった。このように現在のネット公開は台北市内の蔵書に限定されるが、全台湾に今後拡大されても多少増加する程度だろう。

つまり台湾で最大の古医籍蔵書は故宮にある。これまでに故宮所蔵医書の旧蔵先は第一が楊守敬の觀海堂、第二が文淵閣四庫全書、第三がその他であることは分かっていた。また觀海堂旧蔵医書の大多数は、楊氏が明治の来日時に購入したことも知られていた。

そこで昨年、故宮所蔵の全古医籍を实地調査したところ、日本に関連する書は約四〇〇点に及び、ほぼ全てが

觀海堂旧蔵書だった。うち約三三〇点まで親見し終え、森鷗外の『小島宝素伝』他を補訂しうる知見等を得たので、これを中心に概略を報告したい。

楊氏が日本で購入した医書の旧蔵者は、第一に小島尚質(宝素)・尚真・尚綱の小島家。第二に江戸医学館と主宰者の多紀家。第三に小島家関係者で、奈須恒徳・森立之・渋江抽斎・伊沢家・山田業広などだった。

小島家本は第一に尚質手沢本、第二に尚真手沢本、第三に尚綱手沢本の順だった。共用された蔵書印は「小島氏図書記」「博愛堂記」、読書室号は攷古齋・葆素堂・宝素堂・宝素閣・博愛堂で、写本には「攷古齋鈔本」「宝素堂鈔本」と印刷された稿紙が用いられていた。

幕府医官・小島尚質(二七九七〜一八四七)の字は学古、号は宝素だが、彼が書き入れに用いた自称は觀基生・佞宋・佞宋道人・佞宋処士・佞宋学人・円齋後人・棄疎閑人など。蔵書印は「江戸小島氏八世医師」「小島尚質」「字質讀書齋鑑」「尚質」「臣尚質」「尚質之印」「醫師臣尚質印」「小島質精校医経」「字学古」「学古氏」「学古氏印」「小島宝素」「宝素堂」「宝素堂所蔵医書之記」「葆素堂藏

驚人秘笈」「葆素所藏」「佞宋(二種)」「聽雨」などが捺されていた。

なお尚質の著作は『国書総目録』と『典籍総合目録』に、『古刻旧鈔目録』『小島宝素目録』しか載らない。楊氏が彼の全蔵書と著述を購入・帰国し、日本から消失したためである。しかし故宮所蔵の小島尚真『座右筆記』は父・尚質の著作として二三書を列記し、それら自体の所蔵も多くが確認された。

尚質の長男・尚真(一八二九〜五七)は字を抱沖、小字は春沂、号は裊蔭だが、書き入れでは裊蔭生ないし沂と自称する。蔵書印は「尚真之印」「尚真校読」「尚真校定」「抱沖氏」「裊蔭生」「裊蔭」などが捺されていた。彼の著書が日本から消失した状況は父と同様で、『国書』と『古典籍』には、『皇国医籍目録』『今定漢五量考』『宝素堂蔵書目録』の三書しか載らない。前述の『座右筆記』は彼の著述予定書を含めて三四書を列記するが、二八歳の若さで逝世したため約半数しか完成していない。

二男・尚綱(一八三九〜八〇)は兄・尚真の没後にその養子となり、幕府医官を継いだ。尚綱の字は瞻淇、小字

は春澳、号は子錦だが、書き入れには不肖孤と自称する。蔵書印は「尚綱校読」「尚綱之印」のみ。明治以降も門弟と古医籍の校読を続けていたことが書き入れから分かるが、もはや幕府医官ではない。楊守敬が来日した時(一八八〇)は正に尚綱の没年で、妻の定は三八歳、嗣子・杲一は未成年だったと思われる。そうした事情が重なり、家蔵の全書籍が楊氏に渡ったのだろう。

その三七年後の一九一七年に鷗外が『小島宝素伝』を著した時、もはや日本には小島家の家系資料しかなかった。このため、他の医家伝より伝記資料が極端に少ないことは鷗外自身も認めている。これら台湾故宮の小島家旧蔵文献により、『小島宝素続伝』の編纂が今後想定される所以である。

(茨城大学人文学部／北里研究所東洋医学総合研究所)